

## 日本の近代住宅における食事形式と茶の間に関する調査（梗概）

平井 聖  
内田 青蔵

## ■はじめに

明治から終戦までの日本の住宅では、これまで先進的な建築家による近代的な住宅についての研究が主で、多数を占めた和風の一般的な住宅についての研究は、それほど多いとは言えません。しかし、日本人の生活習慣を通して住宅をみると、伝統的な感じの強い在来の和風住宅を見逃すわけにはいきません。和風の住宅においても、明治から今日まで様々な変化が起っていますが、次第に家族の生活を重視するようになっていく風潮は、変化を起こさせる最も大きな原因になったと考えられます。使い方の変化が間取りを変えていくのですが、その中でも、食事の形式が変わって家族が食卓を囲んで食事をするようになることが、茶の間の家の中で占める位置が変わり、ひいては全体の間取りが変わっていくことと深くかかわっていると推測されます。

そこで、食卓を使うようになる前の食事の形式である銘々がお膳で食べる習慣がいつ頃まで家庭の中で残っていたか、いつ頃から食卓が使われるようになったかを調べる必要があると考えました。

まず、これまでに調査した明治・大正・昭和3代にわたる雑誌、新聞そして家庭小説から変化の始まる時点をおおよそ推測しました。それらによると、おおよそ明治30年頃からその傾向が始まると考えられます。そこで、それならば現在まだ御存命の方々を対象としてアンケート調査をすれば、より広い範囲で、この変化をとらえることができると考えました。

まず、調査可能な集団をみつけなければなりません。最も身近で、しかも明治・大正・昭和にわたっていわゆる中流階級を形成した階層であることを考慮して、東京工業大学とその前身である東京高等工業学校の卒業生にアンケートを試みることにしました。

しかし、そこに全く問題がないわけではありません。第1に、中流階級とは何か、なぜ中流階級なのかという問題があります。最初はあまり厳密に考えることなく、当時としての中の上、あるいは上の下くらいで、高等教育を受け、ある程度の進歩的な考え方をもち、社会の中堅をになった人々ということにしました。その点では東

京高等工業学校いわゆる蔵前の卒業生は、会社のトップクラスをねらうのではなく、工場長クラスの中堅技術者をねらっていたのですから、最適だと思います。ただ、技術者にかたよって、文科系の人々の様子が反映されないという欠点があります。

また、東京高等工業学校には全国各地から生徒が集まっていました。それらの生徒達の家庭の職業も様々でしたから、地域的あるいは社会的な面での分析を試みるにも適しています。

アンケートを試みる以上、お膳から食卓に変わり始める始めをみつけるだけでなく、どのような傾向で変化がすすみ、いつ頃になるとお膳を使わなくなるのかという時間的変化もみようと思いました。現在の状況を考えてみれば、もうほとんど銘々のお膳を使って食事をすることはありません。日本式の宴会でも食卓が多くなりました。しかし、旅館での朝食や温泉宿での宴会などに、お膳が出てくることがあります。本式の和風料理にも使うのかも知れませんが、あまり高級な所で食事をしたことがありませんからわかりません。とにかく、私自身の家庭では、日常も元旦などの節句にもお膳を使った経験がありません。日常的には、日本中探してもまずお膳で食事をしている家はないと言ってもいいのではないのでしょうか。それなら、アンケートの結果として、お膳を日常の食事に使ったことがない人が100%という年代が下限として考えられるはずです。

そこで、下限を昭和16年生れまでとしました。しかし、この下限は始めから設定できたわけではありません。調査前には、自分の経験から昭和25年までの卒業生、言い換えれば、ほぼ大正末までに生まれた人々までを調査すれば、だいたい0に収れんする様子はわかるだろうと考えていました。ところが、結果的には私の予測は私の育った東京西南郊については当たっているものの、全国的にはあてはまらないということがわかりました。そこで下限を昭和16年生れまでと変更したのです。

その次に、地域的な特色をみるために、全国幾つかの地区にわたって調査を試みようということを計画していました。それも、だいたい東京高等工業学校と東京工業大学の卒業生を地域的に分析すれば、地域的な変化の傾向がわかるはずだと考えていましたから、1地区

1500人程度調査すればよいと予測していましたが、回収率と変化の期間の関係から、およそその4倍程度の人数を対象としなければならなくなりました。

その結果、地域的には全国と2地点しか対象にできませんでした。

以上のことをふまえて、以後調査した項目とその結果の主要な部分を概略報告することにいたします。

## ■文献資料からの見通し

江戸時代の末期、嘉永6年(1853)に庶民の生活を記録した『守貞漫稿』が出版されています。この本の中に、当時食事に使われていた道具が描かれています。そこには各種の膳があげられています。通常の4本足の膳各種、短いもの、長いもの、そして箱膳や丸形の膳などです。この本の中には共同で囲み、座って使う食卓はありません。

一方、同じ江戸時代末期に出版された『料理通』をみると、料理屋の景ですが、曲線形の脚がついた周囲が梅鉢形風にくれている円形の食卓が描かれています。甲板の周囲には彫刻があって、中国風の趣があります。

これらの2冊の本からみると、江戸時代の末に食卓を使うということが始まり始めましたが、一般庶民の日常生活のものではなかったといえることができるでしょう。

明治10年頃から日本でも家政学の教科書が出版されるようになりました。女子の教育が始まり、衣食住に関する習慣や躰の教科書が生まれたわけです。家政学の教科書は、日常的に行われていたことを記述したものではなく、あるべき姿や外国から導入したほうがよいと考えられたものが取り上げられているのですから、実情とはかけはなれているかも知れません。

とにかく、家政学の教科書で、日常的に座式の食卓を使うようにと書かれたのは、明治22年に瓜生寅の著した『通信教育女子家政学』が初めのようなようです。この本には、「家内中の食事はもちろん、来客の時といえども成るべくは一人毎に膳を配るを廃て、一脚の低き食卓(テーブル)を用ひ大家団樂で食事をも為し又酒宴にも用ひなば更に限なき時間を省き勞力費用を減ずべし」

と書いてあり、その目的が一家団樂、省労力にあったことがわかります。また、明治27年に出版された民友社の『家政整理』では膳と食卓が併記されていますが、明治36年の村井弦井齋著『食道楽』になると

「今では大概の家に食卓がおいてある、畳の上の平膳物を食べずに、食卓のうえで食べるようになったのはいちだんの進歩に違いない。」

とまで書かれるようになります。

一方、国語の小学校用教科書では、日常生活の四季や

住居の部屋や機能そして家具・道具について書いていますが、明治20年出版の『日本読本』ではお膳しか出てきません。

家政学の教科書だけでなく、明治になると家庭向、女性向の雑誌が出版されるようになります。その中の「家庭雑誌」「家庭之友」「婦人之友」をみる限りでは、明治28年の「家庭雑誌」5月号に

「家屋といひ、衣服といひ、食卓といひ、夫々皆児童の教育に預りて益をなすものなり。」

とあるのが最初です。次は明治40年にまで降った、「家庭之友」3月号に

「毎日のお膳だての心得は、まず食卓を据へ、茶椀箸箱その他の容器を備へ」

と書かれている記事ですが、この頃になると明治41年の「婦人之友」の4月号の「平民的家屋に要する家具」や、42年8月号の「家具調べ」にも食卓が顔を出すようになるのです。

小説では、大正10年前後の『永遠の謎』(大正11年長田幹彦著)に

「婆やが運んで来た大きな塗膳を縁側に据えさせ」

とあるのがその時代を描いた小説として銘々の膳が登場するおそい方であるのに対して、食卓のほうは明治38年から39年にかけて発表された夏目漱石の『吾輩は猫である』の挿絵に丸形のもの描かれ、同じ明治38年の『琵琶歌』(大倉桃郎著、大阪朝日新聞)には

「一家揃うて晚餐の卓に楽しむ様にならうとも、」

「食卓に並べてお給仕さして召上るだけの相違だ、」などと出てきます。谷崎潤一郎も『鬼の面』(大正5年)の中で

「けれども親子四人揃って、久し振りで一つ餉台の晩飯をたべる時分には、母も壺井もすっかり機嫌がよくなって居た。」

と餉台(ちゃぶ台)を囲む浅草区役所の吏員壺井の家の夕食の様子を描写しています。大正になると食事の場面に食卓が登場するのが普通になります。

そのほか、明治23年に開かれた第3回国勸業博覧会にちゃぶ台(食卓)が出品された記録があり、明治26年刊の『日本大辞典』にちゃぶ台の項があらわれ、明治42年に当時の庶民の暮しを描いた記録『東京二十四時』には「一日の楽しみはこれ」と題して食卓を囲む家族が描かれ、お膳は出てこないなどの事例があります。

このようにみえてくると、先導的な性格の家政学の教科書や婦人雑誌の記事には明治20年代にすでに食卓のすすめがあらわれ、また辞典にもなる場合があり、博覧会の出品目録にもちゃぶ台があがってくるのがわかります。

明治30年代の後半になると、小説にもしばしば取り上げられ、料理書でも食卓普及の様子を知ることができる

ようになります。それを裏付けるように、40年代早々には一般家庭の持ち物に食卓が入るようになるのです。

そこで、明治20年生れの方から調査を始めればよいということになるのですが、明治23年が1890年に当り、今年98歳ということですから明治45年で76歳、いずれにしても明治生れの方々にお願いしてアンケートをすることは、なかなか難しくなったと思います。

## ■調査事項

お膳の使用実態と食卓の使用実態を調べるために、調査項目はそれぞれの項に分けて行いました。

まず、お膳に関する項目です。

### ①使ったことがありますか

この項目は、日常にお膳を使っていたことがあるかどうかを聞く項目ですが、同時に冠婚葬祭のときに使ったという事例についても聞いています。最初に行ったグループでは、日常と非日常との区別が完全にできていないのではないかとと思われる回答が出てきました。また、註記でも、この点わかりにくいとか、わかりにくいために補足説明を加えている方が何人も出てきました。そこで、設問としては矛盾するのですが、始めに日常の食事についてお答え下さいと断り「はい」「いいえ」の答えをしてもらった上で、再度お膳を使ったのは、毎日の食事のとき、元旦などの節句、冠婚葬祭、客などの時という選択肢を設けて○をつけていただくことにしました。結果は、一度「いいえ」を選んだ人が、次に冠婚葬祭を選んだために、もとへもどり「はい」につけ直すというような迷いがあらわれました。そのような迷いにかかわらず、答えを見る側としては、明確に非日常であるということを読みとれるのですから、この項はより確かになったと思っています。

### ②いつまでお膳を使っていましたか。

この項目以下は、始めに日常にお膳を使っていたと答えた人だけに答えてもらうことになっています。

昔の記憶を聞くのですから、何年と聞いてもなかなかすぐには答えられないのではないかと考え、何年という答か何歳という答のいずれでもよいことにしています。このことは食卓などについて時期を聞く時は常に同じです。結果的には両方に答えている場合に、一致しないということが起こりました。

### ③お膳を使って食事をしてきた部屋の名称を教えてください。

お膳を使って食事をしてきた時代に、食事をする部屋はどのような部屋であったかを調べたいと考えて加えました。

### ④お膳を使って食事をしてきた頃の世帯主の職業をお答え下さい。

おそらく、お膳を使って食事をしてきたのは、独立する前の子供の時であろうと考えました。そこで、その家族の父親の職業を尋ねることにしたのです。これは、職業によってお膳を使い続けた期間がちがうであろうと推定したからです。例えば、農村ではおそくまでお膳を使っていたという結果が出るのが予想されたのです。

### ⑤その頃、お住まいになっていた場所はどこでしょうか。

地域によって、お膳を使い続けた期間がちがうことが予想されたので、この項目を設けました。

筑波大学の熊倉功夫氏の「食卓と作法―食事作法を促した共同膳・チャブ台」では、

「意外なのは銘々膳形式の箱膳や足つきの膳がごく最近まで残っていて、チャブ台式の共同膳の生命は案外短いのではないかとという点である。前掲の村本・平井論文によれば家政学関係の書物にチャブ台がとりあげられるのは明治二十年代からで、明治三十年代後半には相当広く普及していたようだ、と推定されておられる。ところがチャブ台は一挙に普及したというものではないらしい。

家庭での定着は地域差や個々の環境の差がこのほか大きいようだ。銘々膳から共同膳へ移行した時期を八十三例について分類すると別表（省略）のごとくになる。わずかな数なので、これから結論めいたことはいえないが、明治二十四年生れの女性（東京）が生家ですでに箱膳は使っていなかったと語っている例が一番古く、埼玉県で昭和四十三年まで箱膳を使っていた例がこの調査では一番新しい。

もちろん今でも使っておられる向きもある。しかし、移行の時期が大正から昭和の初年にほぼ半数が集中していたことに食卓の変化の大きな傾向がうかがえよう」

とされています。この調査は例数が少なく、地域も混在し、さらに日常・非日常の区別もはっきりしていませんので結論は少々独断的と言わざるを得ませんが、東京では明治24年生れの人が使ったことがなく、埼玉では昭和43年まで使っていた人があるという調査結果は、地域差が大きいことを予想させました。

次に、食卓に関する項目は次のとおりです。設問は基本的にはお膳の場合と共通していますが、食卓の形状や名称の項目が加わっています。

### ①使ったことがありますか。

### ②いつ頃から使っていましたか。

### ③いつ頃まで使っていましたか。

食卓の場合は、生まれた時から使っている人も多いのですが、当然お膳から移り替わった人もあるわけですから、そこで、いつ頃からの項目を設けました。

また、いつまでの項目については、当然現在なお使っている家もあることが予想されます。

- ④ 1) 食卓を何と呼んでいましたか。
- 2) どのような形でしたか。
- 3) 脚はたためましたか。
- 4) 食事のたびに出し入れしていましたか。

以上の4項目は食卓の形式や使い方に関する設問です。現在一般名称のようなつもりでちゃぶ台という名称を使っていますが、私自身子供の頃食卓をちゃぶ台と呼んだ記憶がありません。また、予備的に明治生れの方々にうかがったところでも、おぜん、おだいなどの名称が多く、意外にちゃぶ台と呼んだ人は少なかったように思えました。そこで、食卓の名称を尋ね、さらに名称と形式・構造との間に関連があるのかないかを調べてみようと考えました。

第4番目は使い方に関する項目です。

- ⑤ 食卓を使って食事をしていた部屋の名称を教えてください。

明治の終り頃から昭和の敗戦頃にかけて、都市住宅では茶の間が食事の部屋として確立しています。このことは食事に際して食卓のまわりに家族が集まることと無関係ではないと思っていますので、その点を確認する一つの手段になるのではないかと考えて、この項を設けています。

- ⑥ その頃の世帯主は、どのような職業でしたか。

お膳を使い続けることと職業の間には、関係がありそうであるということと同様に、食卓を使い始める時期と職業の間にも、関係があるだろうと思われまます。

- ⑦ その頃お住まいになっていた場所はどこでしょうか。

食卓の場合も、お膳と同様に地域差が考えられます。地域差というより、都会と地方（農村）というちがいかも知れませんが、そこで、県の下市の市町村名まで聞くことにしました。

## ■調査対象

### 1：蔵前工業会員に対する調査

明治・大正・昭和にわたって調査することが可能な対象であり、会員がこれまで日本の社会でいわゆる中流階級を形成してきたことを考慮して、蔵前工業会（東京工業大学およびその前身である東京高等工業学校の卒業生を以て組織している同窓会）の会員をまず調査対象とすることにしました。

会員数も多く、出身も全国的であり、地域的な考察や出身家庭の職業についても、ある程度傾向をみる事が可能であると予測されました。

すでに「はじめに」の項で述べたように、お膳から食卓への変化があらわれる頃から、お膳を使う人がほとんどいなくなるまでをまず対象としたいと、大正末までの生れ年の人を選ぶことにしました。しかし、結果的には

終末期の様子が予測できず、さらに対象をひろげ最終的には昭和16年生れまでになりました。卒業年次で対象者を選びましたから、昭和16年生れより後の人も入り、昭和17年生れまでは分析可能な程度の回答数が得られ、昭和18年生れについても傾向をみる程度のことは可能になりました。

実際の有効回答数は4073となりました。アンケートを発送した総数は8200通、名簿不備のために手紙が着かなかったのが778通ありましたので、54.88%の回収率ということになっています。

### 2：秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内、秋田県在住者

分析の項で詳しくは触れることとなりますが、蔵前工業会員の東京在住者と農村出身者の場合に、お膳を使ったことがある人の傾向が違います。蔵前工業会員の場合には、特定の地域出身者が固まっているわけではありませぬので、地方と東京という違いをみるのに都合のよい資料を得ることができません。そこで、いろいろなまともを考えて違いのある傾向がみられないかと探ったところでは、東京在住者の場合と、家の職業が農業の場合に傾向の違いがみられました。この違いが地方における知識階級の場合にも同じようにみられるのかを、秋田県の地方都市である大館を例にとりて、調査をしてみました。

大館には、戦前から大館中学校がありました。もちろん、地域を出て更に上級の学校に進む人もいないわけはありませんが、当時一般的には地方では中学校を出ることがエリート層を構成する要因でした。そこで、現在存命の最も古い会員から調査を始め、100名以上の存命会員のある学年からは、名簿の始めから100名を調査対象とすることにしました。

調査範囲は、上のような考えから、古いほうは明治38年卒(明治19年生まれ)、新しいほうはお膳を使う人がほとんどいなくなるまでを対象としたいという基本的な考え方は同じですが、地方ではかなり後までお膳が日常的に使われていたと共同研究者の経験からも十分に予測できましたので、昭和40年卒(昭和22年生まれ)までとすることにしました。

その結果、アンケートを発送した総数は5000通、名簿不備のために手紙が着かなかったのが435通ありましたので、発送した総数に対する回収率は27.8%、実質回収率は30.45%ということになっています。

但し、この地方都市における調査が、秋田県の大館市でなければならぬという理由はありません。本来なら、同じような地方都市を幾つか選んで、地方都市の一般的な傾向かどうかを、確かめなければならぬところです。

### 3：東京都・東京学芸大学附属世田谷小学校同窓会員の内、城南地域在住者

蔵前工業会員の場合には、東京在住者の場合にお膳を

使ったことがない人が比較的早くから認められ、家の職業が農業の人との間に差異がみられます。そのような傾向の中で、東京の中でも地域による傾向の違いが予測されます。そこで、食卓が変わるのが早いと想像できる山の手から地域を選んで調査をしてみることにしました。山の手の中流階層ということ、役人・学者・会社員のような、いわゆる中流階層の子弟が大半という特徴がみられる東京学芸大学附属世田谷小学校の卒業生を対象にすることにしました。この小学校は100年を越える歴史があり、昭和の始めには東京府立青山師範学校の附属小学校として青山にあり、昭和11年から世田谷区の下馬に、戦後おなじ世田谷区ですが深沢に移っていますが、児童の家庭環境はほとんど変わっていません。ここでは調査対象を現在も城南地域に住む男性とし、秋田県大館市の場合と同様に、現在存命の最も古い会員から始めました。これまでの経験から回答数が比較的少なくても傾向を掴むことができることがわかってきたので、多くの存命会員のある学年では各卒業年次の名簿の始めから20名を調査対象とすることにしました。

調査範囲は、上のような考えから、古いほうは大正2年卒(明治34年生れ)、新しいほうはお膳を使う人がほとんどいなくなるまでを対象としたいという基本的な考え方は同じですが、東京ではかなり早く食卓が日常的に使われるようになり、お膳は早くに日常的には姿を消したと予測されましたので、昭和20年卒(昭和7年生れ)までとすることにしました。

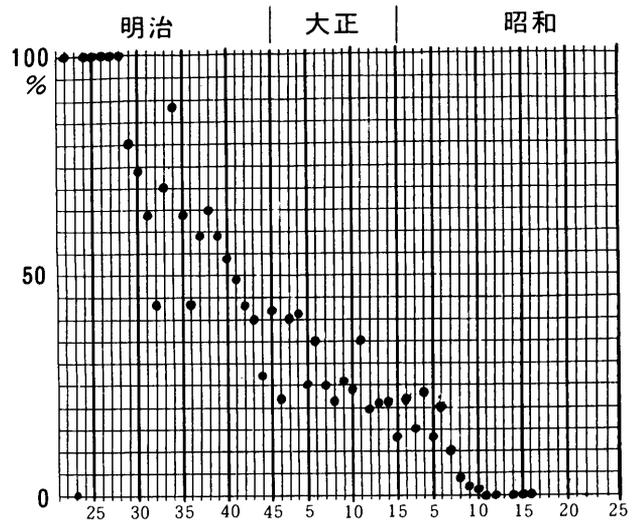
その結果、アンケートを発送した総数は500通、名簿不備のために手紙が着かなかったのはほとんどなく、発送した総数に対する回収率は50.6%ということになります。

## ■お膳を使ったことのある人

### 1：蔵前工業会員の場合

アンケートの回答者の内で、最も古いのは明治22年生れですが、この方はお膳を使ったと答えています。当然明治生れの多くの方々は、日常的にお膳を使っていたと考えられます。おそらく、中には夕食だけお膳を使い、朝は食卓だったなどという人もあると思われそうですが、あまり細かいことを聞いても答えがあいまいになるだけです。日常の食事にお膳を使っていたかどうかだけを聞くことにしています。その後、24～28年の生れの回答者もお膳を使ったと答えています。23年生れの回答者は、使わなかったと答えています。蔵前工業会員の場合では、この回答者が始めから食卓を使っていた最も早い例となります。明治29年生れからは必ずお膳を使ったことのない人が含まれるようになり、傾向としては明治40年生れの人位からお膳を使わなかった人のほうが多くな

第1表 蔵前工業会員 生まれ年ごとのお膳を使った人の百分率



ります。そして、昭和11年生れからは、お膳を使った人が全くなくなります。その傾向を示したのが、第1表です。

蔵前工業会員の場合には、その出身は全国に及んでいます。また、育った家庭の職業も、多岐にわたっていると考えられます。そこで、出身地や家の職業がどのように影響しているかを、試しにみることにしました。但し、出身県や家の職業が県ごとあるいは職業別に比較できるような資料ではありませんから、一つの例として東京在住者、家の職業が農業の場合を拾い出してみました。

その結果東京在住者の場合には、明治29年から急激にお膳を使ったことのある人が減少し、傾向としても35年位には半分になっていて、昭和9年からは使ったことのある人が全く無くなります。これに対して、家の職業が農業という人の場合は、ずっと遅れています。地域と職業という全く異なった切り方では、本来は比較できないのですが、東京在住者というのほとんどがサラリーマンですから、しいて言えばサラリーマンと農業の人での変化の時期に相当の差があるということになります。蔵前工業会員全体の傾向からみると、東京在住者は早いほうに、家が農業の人は遅いほうにずれているということになります。

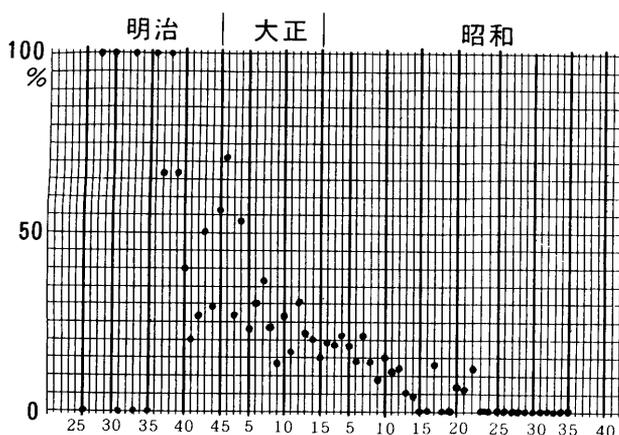
これを、各生れ年ごとに職業との関連をみると、お膳を使った人達の場合には農業が比較的多く、始めから食卓だった人達の場合には比較的サラリーマンが多いことがはっきりわかります。その傾向は、年代によってほとんど変化していないと言ってもよいでしょう。

### 2：秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内、秋田県在住者

アンケートの回答者の内で、最も古いのは明治26年生れで、この人は始めから食卓だったと答えています。明治20年代から30年代の半ばまでは回答者が少ないので、

百分率は極端に動きます。30年代の後半になると傾向がわかるようになります。その傾向では、明治42・43年頃に、お膳を使わなかった人のほうが多くなります。そして、昭和15年に初めて、始めから食卓だった人ばかりという年代が現れますが、その後も少しですがお膳を使った人がいて、お膳を使った人が全くなくなるのは、昭和23年生れからです。その傾向を示したのが、第2表です。

第2表 秋田県大館 生れ年ごとのお膳を使った人の百分率



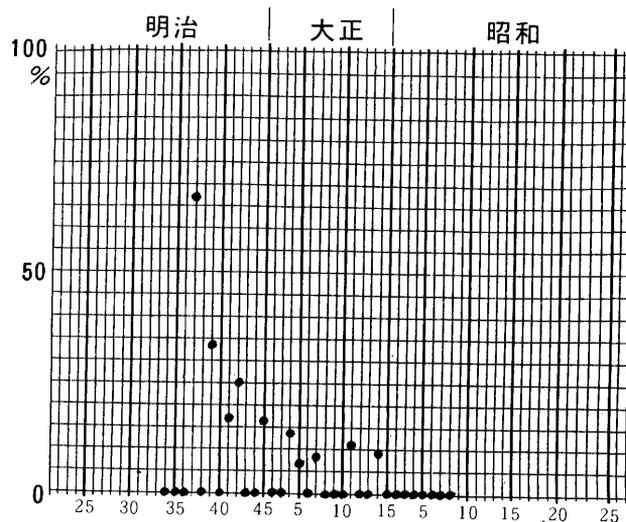
先の蔵前工業会員の場合には、お膳を使った人達と始めから食卓だった人達との間には、家の職業に相違がみられました。秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の場合にも、職業との関連をみるとここでも、お膳を使った人達の場合には農業が比較的多く、始めから食卓だった人達の場合には比較的サラリーマンが多いという傾向は確かですが、いずれの場合にも蔵前工業会員の場合に比べて、農業が多くなりサラリーマンが少なくなっています。

### 3：東京都城南地域在住者

アンケートの回答者の内で、最も古いのは明治34年生れで、この人は始めから食卓だったと答えています。一般的に回答者が少ないのですが、それでも40年生れ位からは毎年5人以上の回答者があり、傾向が掴めます。明治37年生れでお膳を使った人が50%を越えていますが、34年生れを始めとして0%の年も多く、明治30年代の後半の生れで、お膳を使った人達が10%を割る程であるとみてよいと思われます。従って東京都城南地域在住者の場合には、お膳を使った人達が半分以下になる時点をとらえることはできません。また、推定することも、難しそうです。明治34年生れからというには例数が少ないのですが、明治34年生れからは、お膳を使った人が全くいない年代が多くなります。そして、お膳を使った人が全くなくなるのは、大正15年生れからです。その傾向を示したのが、第3表です。

先の蔵前工業会員の場合に、東京在住者にお膳を使わ

第3表 東京都城南地域 生れ年ごとのお膳を使った人の百分率



なくなる時期が早いという傾向が認められましたが、東京都城南地域在住者の場合には、この傾向が一層顕著に認められます。この東京都城南地域在住者は、特に中流階級に限定した対象グループということができるところから、このような調査対象では、この傾向が一層顕著であられたと言えるでしょう。

先の蔵前工業会員の場合、および秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の場合には、家の職業について生れ年ごとの分布をみましたが、東京都城南地域在住者の場合にはほとんどすべてがサラリーマンで、わずかに商工業を含む程度ですので、職業からの分析は行っていません。

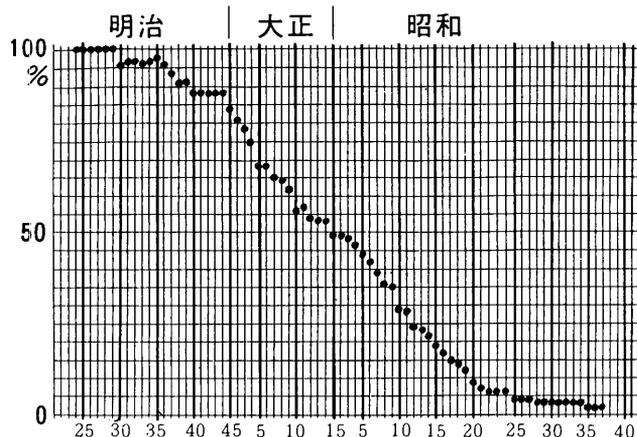
### ■お膳を使い続けた人達

お膳を使った人達は、いつまでお膳を使い続けていたでしょうか。世間の広まっていった習慣に影響されて、次第にお膳をやめて食卓に変わっていますが、始めは両方を併用している時期が当然あったでしょう。アンケートの回答では、お膳を使うのをやめた時期と、食卓を使い始めた時期を聞いていますが、その答えから両方が重複して使われたと判断できる回答が多くみられました。そこで、まずお膳を使うのをやめた時期を考慮して、お膳を使い続けた人が、どのように減少していったかをみることにしました。

#### 1：蔵前工業会員の場合

ある年を設定し、その年までにお膳を使ったと答えた人の数を累計し、そこからその年までにお膳を使うのをやめた人を累計して差し引いて、その年の時点でお膳を使っている人の数を勘定します。これをその年までにお膳を使ったと答えた人の数の累計に対する比率をとったのが第4表です。始めの内はお膳を使ったと答えた人が

第4表 蔵前工業会員 お膳を使ったと答えた人のその年までの累計に対するその年まで使い続けていた人の累計の百分率



累加され、やめた人も少ないので曲線は緩やかですが、大正に入ると急になり、一直線状に減少しています。昭和22年からまた緩やかになり、26・27年頃に0に近づきます。その後も少し残っているようですが、これはいつやめたか記入していない回答があるための誤差ということになります。

2：秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内、秋田県在住者

蔵前工業会員の場合同様に、秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内の秋田在住者の場合について、お膳を使い続けている人の累計を示したのが、第5表です。

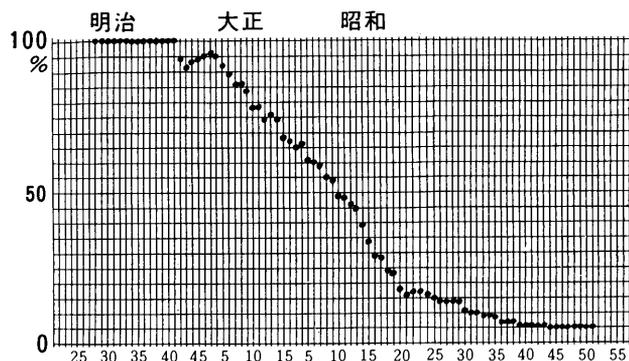
明治42年から大正3年までのあいだは、一度減少して再び増加するという動き方をしています。この変化がどのような理由によるかわかりませんが、蔵前工業会員の場合同様に、秋田の場合より幅は少ないのですが同じような動きがみられました。そして、大正3年からは減少を始め、昭和14年から傾向が多少急になり、20年前後から緩やかになります。最後が0にならず、5%に収れんして5%以下に下がらないのは、蔵前工業会員の場合同じ理由と考えられます。減少の平均的な勾配は、蔵前工業会員の場合同じですが、8～9年遅れていることとなります。

3：東京都城南地域在住者

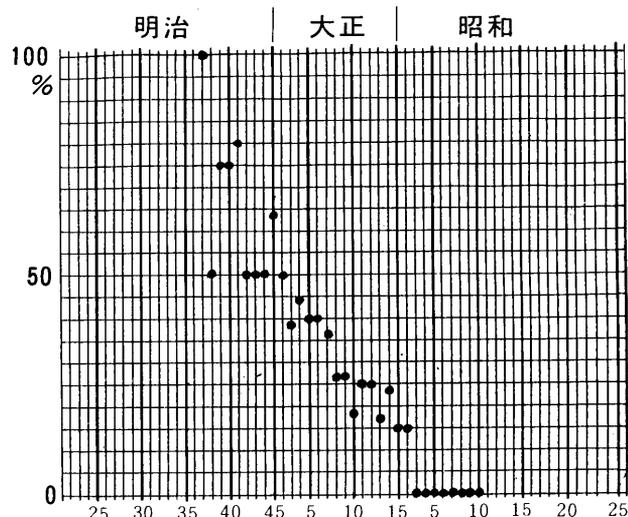
再び同様に、東京都城南地域在住者の場合のお膳を使い続けている人の累計を示したのが、第6表です。

明治37年から始まりますからこの時点が100%ですが、その後急激に減少して、昭和3年には0になります。減少の勾配は、蔵前工業会員の場合同様に、かなり急とみてよいでしょう。勾配が違うので比較は難しいのですが、蔵前工業会員の場合同様に、10年は早いのではないのでしょうか。

第5表 秋田県大館でお膳を使ったと答えた人のその年までの累計に対するその年まで使い続けていた人の累計の百分率



第6表 東京都城南地域でお膳を使ったと答えた人のその年までの累計に対するその年まで使い続けていた人の累計の百分率



■食卓を使っていた期間

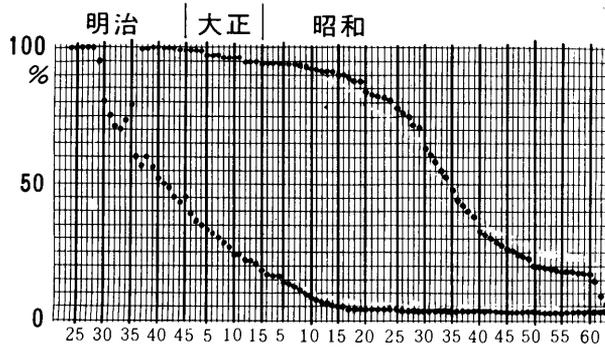
次に、こんどは食卓についてみてゆくことにします。前の項の始めに述べたように、食卓の使い始めはお膳と重複していますので、食卓の使い始めの曲線はお膳を使い続けている人のそれとは一致しません。そして、当然ですが食卓の使い始めの曲線は、お膳のそれより早いということになります。

また、同じ表の上にもう一つの曲線が描かれます。表の右上の曲線は、食卓をやめた人の累計を示しています。従って、この2本の曲線で囲まれた中が、食卓を使っている人達の年毎の比率や使っていた期間を示しています。

1：蔵前工業会員の場合

第7表でみるとおり、明治29年から食卓が使われるようになり、食卓を使うようになる傾向は、始めが急でわずかですが、次第に緩やかになる半径の大きな曲線と

第7表 蔵前工業会員 それまで回答した人の累計に対する(右下)始めから食卓だった人とお膳から食卓に変わった人の累計の百分率,(右上)は食卓を使い続けている人の累計の百分率



なっています。この曲線を、先のお膳を使い続けている傾向と比べると、始発点は同じですが、食卓のほうが急激で、その差は最も広い所で15年程となっています。この差は、両方が重複して使われていた期間をあらわしています。そして、この両曲線は昭和20年頃0に近いところで一致します。0との差の3~4%は誤差と考えられ、昭和20年にはほとんどすべての人がお膳をやめて食卓を使うようになったのです。

食卓をやめた人達の累計を示す曲線は、始めが緩く次第に急になり、昭和50年位から18~17%の所に落ち着きます。この位の人達が今でも日常的に食卓で食事をしているということを示しています。

ついでに、ここでも東京在住者と家が農業の人達について同様な表を作成すると、第8・9表となります。この表を第7表と比較すると、東京在住者の場合には、蔵前工業会員全体の傾向とほとんど変わらず、始めたのも終わるのも全体に比べて、どちらもほんの少し早め、ということになります。

農業の場合には、食卓を使い始める時期が全体に比べて15年位遅く、やめるのがほんのわずか早いということになります。従って食卓を使っていた期間が短いわけです。

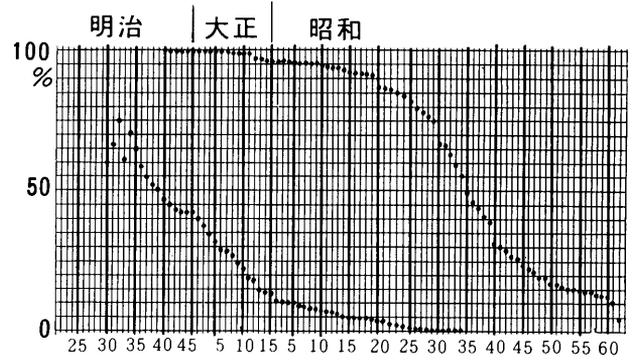
2：秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内、秋田県在住者

第10表でみるとおり、食卓を使うようになる傾向は、回答数が少ないために始めが乱れています。従って、食卓を使い始める時期や傾向は明らかではありません。しかし、この曲線は、蔵前工業会員の場合の同じ曲線に極めてよく似ています。

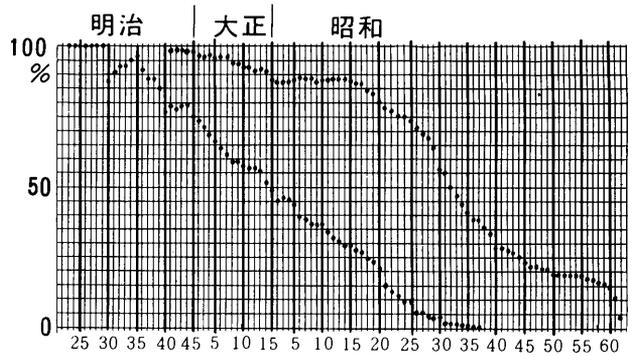
一方、食卓をやめた人達の累計を示す曲線は、始めは蔵前工業会員の場合と似ていますが、大正15年から昭和6年まで急激に増え、その後は蔵前工業会員の場合よりかなり緩やかな減少傾向となります。そして、最後にまだ35%程食卓を使い続けている人達が残っています。

3：東京都城南地域在住者

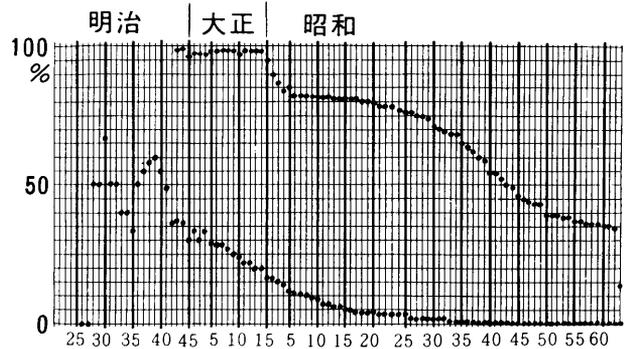
第8表 蔵前工業会員で東京在住者



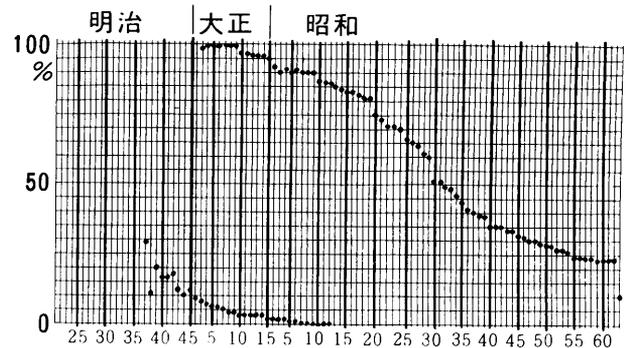
第9表 蔵前工業会員で家の職業が農業だった人



第10表 秋田県大館 それまで回答した人の累計に対する(左下)始めから食卓だった人とお膳から食卓に変わった人の累計の百分率,(右上)は食卓を使い続けている人の累計の百分率



第11表 東京都城南地域 それまで回答した人の累計に対する(左下)始めから食卓だった人とお膳から食卓に変わった人の累計の百分率,(右上)は食卓を使い続けている人の累計の百分率



第11表でみるとおり、食卓を使うようになる傾向は、東京都城南地域在住者の場合には変化がかなり早かったために、初期を調査から明らかにすることができませんでした。曲線を描くことができた明治37年以降では、蔵前工業会員の場合と並行していますが、その間には20年程の差があります。もちろん、東京都城南地域在住者の場合のほうが、早いのです。

もう一つの、食卓をやめた人達の累計を示す曲線は、蔵前工業会員の場合と似ていますがやや緩い勾配で、最後に23%程食卓を使い続けている人達が残っています。最後に残る数を別にすれば、使い終わりの曲線には使い始めの場合のような差はなく、どこでもほとんど同じといえることができそうです。

## ■食事をする部屋の名称

次に、食事をする部屋についての質問を、まとめてみることにします。お膳を使って食事をしてきた江戸時代には、武家の少し上の階層では、主人の食事は主人の居間にお膳を運んでいましたが、現代になると、茶の間や食堂に家族が集まって、食事をするようになりました。このような変化と、お膳から食卓への変化とどのような関係があるかも、興味のあるところです。

また、食事をする部屋の名前は、地域ごとに異なっているということが、知られています。そこで、まず最初に秋田県大館市鳳鳴高校同窓会の内の秋田県在住者の調査から、様子を見ることにしました。

### 1：秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内、秋田県在住者の場合

食事形式との関連を掴むために、お膳を使った人の食事をした部屋と、始めから食卓だった人の食事をした部屋について、時代の推移をみましたが、時代的な変化はあまり大きくないようです。

お膳を使った人の食事をした部屋では、「だいどころ」と「おかって」の合計が平均して44%と多く、始めから食卓だった人の34%と異なっています。これに対して始めから食卓だった人の食事をした部屋では、茶の間が平均的に35%から40%存在し、時代とともに少しずつですが増えています。台所も、平均すれば茶の間と同じ位ですが、時代とともに減少しています。

言い換えれば、お膳を使っていた時には食事をする部屋は「だいどころ」と「おかって」が多かったのに対して、食卓を使うようになると、始めは「だいどころ」や「おかって」で食事をすると、「茶の間」で食事をする人が同じ位か「茶の間」で食事をする人が少し少ない位だったのですが、次第に「だいどころ」や「おかって」で食事をする人が減り、「茶の間」で食事をする人が増えているということになるでしょう。いずれにしても、台

所で食事をすることは少なくなる傾向です。

## 2：東京都城南地域在住者

東京都城南地域在住者についても、おなじような分析をしました。但し、ここではお膳を使った人がほとんどありませんから、始めから食卓だった人の場合となり、そのほとんどが「茶の間」で食事をしています。食事室を「ぎしき」と答えた人がわずかにいますが、「だいどころ」と「おかって」はほとんど無いと言ってもよいでしょう。秋田とは、全く違った傾向です。試しに蔵前工業会員の内の東京在住者について、食卓を使って食事をした部屋の名称を調べてみると、やはり明治から「茶の間」が大半を占めることがわかります。しかし、東京都城南地域在住者に比べると、「だいどころ」と「おかって」がでてくる頻度が多いということが言えます。茶の間の平面の中での位置はわかりませんが、東京都城南地域では明治30年代の初期には、ほとんどの家で茶の間で食事をしてきたことになりすし、この傾向が更にさかのぼることは確実です。

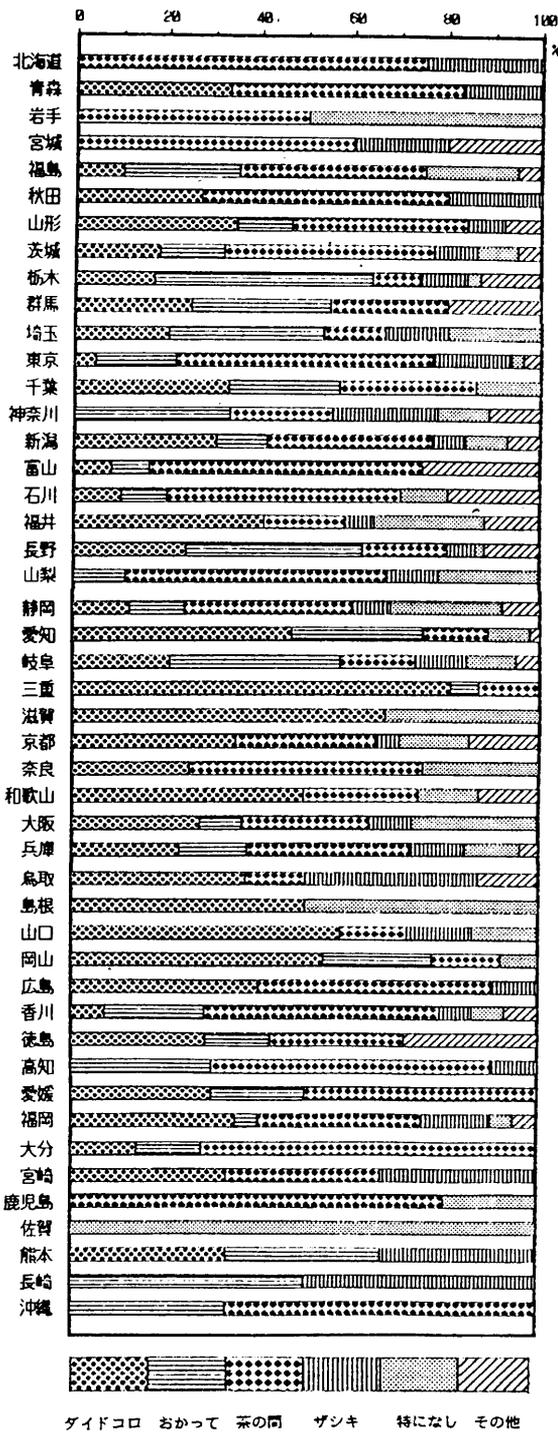
## 3：蔵前工業会員

秋田と東京の場合でみたように、食事をした部屋の名称は、年代的な推移よりも、地域的な特色のほうが顕著なようです。そこで、蔵前工業会員の場合には、県ごとに分けて、使われた部屋の名称がどのように違っているかの、地域的特色を見ることにしました。但し、お膳を使った人と、始めから食卓だった人については区分して、それぞれでまとめることにしました。その結果が、第12表（お膳を使った人の場合）と第13表（始めから食卓だった人の場合）です。

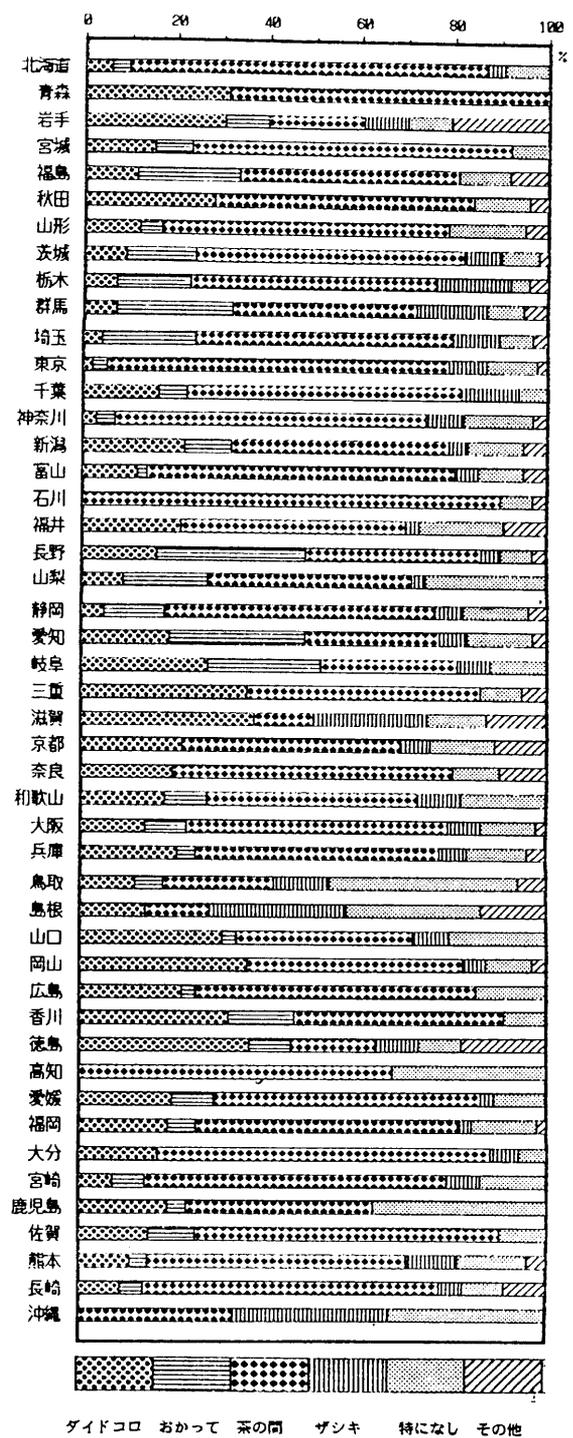
全体的には、お膳を使った人の場合のほうが「だいどころ」と「おかって」の合計が占める割合が多く、始めから食卓だった人の場合のほうが「茶の間」が多いという特色がみられます。例数の少ない県もあるので表だけから直ちに特色を引き出すわけにはいきませんが、例えば北海道ではどちらの場合も茶の間が大半を占め、愛知・岐阜・長野ではどちらの場合も台所（勝手を含む）が多いことがわかります。群馬・埼玉・千葉・奈良・和歌山・大阪・岡山等が台所が減り茶の間が増えたのが目立つところですが、ほかにも目立つ県がありますが、例数の少ない所は傾向としては確言できません。

## ■食卓の名称

最後に、食卓の名称について、まとめておきます。食事をする部屋の名称より更に地域的な特色が現れると考えられます。しかし、一方では日常的に使っているときには、特に名称を呼ばないという傾向もあり、そのような場合には現在一般名称のように使われている「卓袱台（ちゃぶ台）」と答える人がでてきていることも、予想さ



第12表 蔵前工業会員で県別のお膳を使った時代に食事をした部屋の名称



第13表 蔵前工業会員で県別の食卓を使って食事をした時の食事室の名称

れます。従って、選択肢の中で「ちゃぶ台」だけは、実際に呼んでいた以上に選ばれる可能性を持っているでしょう。そのようなことを考慮しながら、結果をみることにしたいと思います。

### 1：蔵前工業会員の場合

調査では、食卓の名称としてあらかじめ

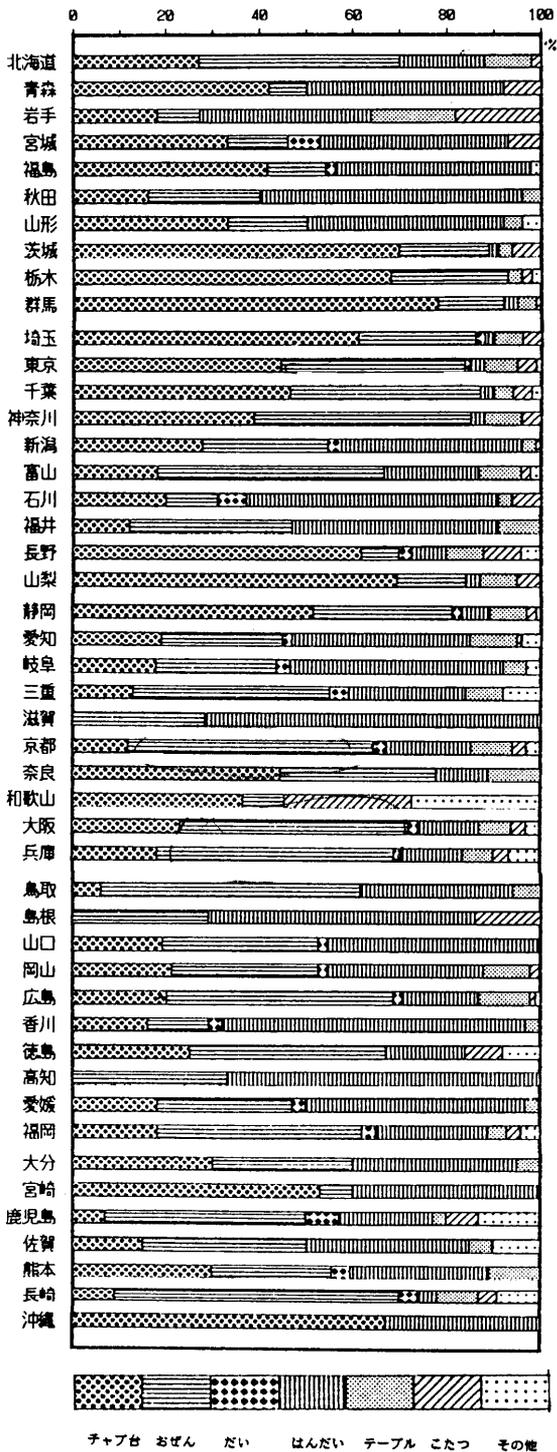
- a. ちゃぶ台 b. おぜん c. だい d. はんだい
  - e. テーブル f. こたつ (g. その他)
- の6種類をあげています。これらには、あまり使われていないだろうという名称も含まれていますが、種類が少

なすぎて特定の名称に答えを誘導する結果になっていけないと考えて、項目を増やしています。

集計の結果では、これらの名称の中で、a. ちゃぶ台 b. おぜん d. はんだい の3種類がどこの県についても大部分を占めるということになりました。そのほかにはe. テーブルが多くはありませんが、どこの県でも平均的に使われていることがわかります。県ごとに各名称の占める割合を帯グラフにしたのが、第14表です。

広く使われているちゃぶ台・おぜん・はんだいについては、県によって使われ方に特徴があり、地域的な呼び

第14表 蔵前工業会員で県別の食卓名称



名があることがわかります。そこで、それぞれについて、よく使われている順にその地域性の傾向を探ってみることにしました。県ごとの回答数が少ないと、傾向としてとらえることが難しくなりますから、回答数が20件以下の県は除いて並べかえてみました。

a. 「ちゃぶ台」 上位10県は、関東地方および関東近県となります。入っていない神奈川も第11位ですから、「ちゃぶ台」という名称は、関東の名称であると言ってよいでしょう。逆に使われることが少ない県は、鹿児島・福井・香川・京都・三重・秋田と地域的にはばらばらで

す。しかし、これらの県は、次の別の項で明らかのように、いずれも他の2種類の名称が多く使われている県です。

b. 「おぜん」 滋賀・奈良・和歌山が件数が少なくはつきりしたことは言えませんが、京都・大阪・兵庫と近畿地方の主要な県が、上位10県に入っています。そのほかには、地域的なまとまりがみられません。第11位以下には、鹿児島・東京・千葉が40%以上で続きます。上位に入っている県の中で、京都・三重・鹿児島は、「ちゃぶ台」のところで最下位からの10県に入っていました。

「ちゃぶ台」の場合には、第1位の群馬県の比率が77%であったのに対して、「おぜん」のほうは第1位の広島県が54%と低く、緩やかに減っていくのが特徴です。

最下位からの10県の内では、長野・福島・群馬・山梨・茨城の5県が、「ちゃぶ台」の上位10県に入っています。

d. 「はんだい」 上位10県は、東北地方の秋田・山形・福島、四国地方の香川・愛媛、北陸地方の石川・福井、東海地方の岐阜・愛知、それに山陰地方の山口ということになり、特に強い地域性は認められません。しかし、最下位からの10県の内9県までが、下から11位の長野を加えると最下位から11県の内10県までが「ちゃぶ台」で上位11県に入っています。「ちゃぶ台」の名称が大勢を占めている関東近県では、「はんだい」と呼ぶことはほとんどないということになります。それ以外には、県を越えた地方的な特色は、特にみられません。

### 2：秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内、秋田県在住者

蔵前工業会員の内で秋田県の特徴は、「はんだい」と呼ぶ人が56%、「おぜん」24%、「ちゃぶ台」16%、「テーブル」4%と、「はんだい」の名称が全国でも最も多く使われているということでした。このことを確かめるために、秋田県大館市鳳鳴高校同窓会員の内の秋田県在住者について、調査の結果をまとめました。経年的にはほとんど変化していません。平均をとってみると、「はんだい」と呼ぶ人が65%、「テーブル」12%、「ちゃぶ台」11%、「おぜん」10%となり、やはり「はんだい」と呼ぶ人が圧倒的に多いことがわかります。

### 3：東京都城南地域在住者

東京都城南地域在住者の場合は、経年的にはほとんど変化が無いと考えられるので、全体の比率をだしてみました。その結果は、多いほうから

「おぜん」	42%	(41%)
「ちゃぶ台」	38%	(41%)
「テーブル」	9%	(7%)
「はんだい」	4%	(3%)
「こたつ」	3%	(4%)
「だい」	2%	(1%)
その他	2%	(1%)

となりました。( )に示したのが蔵前工業会員の内の東

京の人達の比率ですから、ほとんど変わりませんが、城南地域のほうが「テーブル」等と呼ぶ人が多いだけ「ちゃぶ台」と呼ぶ人が少なくなっていると言えるでしょう。この東京都城南地域在住者の場合だけ名称とともに、形についても集計してみました。その結果は、

長方形 50%  
円形 20%  
正方形 18%

となりました。その他4%（記入無し11%）には楕円形がありますが、長方形と正方形を合わせた68%もが四角い食卓を使っていたわけです。それぞれの名称ごとに形の比率に特に相違は無く、名称と形の間に特徴ある関係はみいだせません。

	長方形	正方形	円形	その他	記入無	%
ちゃぶ台	19	5	8	1	4	38
おぜん	22	8	9	0.3	3	42
だい	1	0.3	0.3	0	0.3	2
はんたい	2	1	1	0	0.3	4
テーブル	4	2	1	0	2	9
こたつ	1	1	0	0	1	3
その他	1	0	0.3	0	0	2
%	50	18	20	1	11	

## ■おわりに

この報告では、明治以後の日本人の住生活の変化の一つとして、食事形式を取り上げ、銘々がお膳を使う形式から家族が食卓を囲んで食事をする形式への変化を追ってきました。特に、その変化を先導したと考えられる中流階級について、三つの事例を分析しています。

その結果、銘々がお膳を使う形式から家族が食卓を囲んで食事をする形式への変化は、明治30年代生れの人達からいずれの場合も明確化し、全般的には明治40年代生れの人達になるとお膳を使わなかった人のほうが多くなる傾向にあります。そして、蔵前工業会員の場合には昭和11年生れからお膳を使った人が全くなくなり、秋田の場合には、昭和15年に初めて始めから食卓だった人ばかりという年代が現れ、昭和23年生れからはお膳を使った人が全くなくなります。これに対して、東京都城南地域在住の中流階層では、明治35年をはじめとして0%の年も多く、明治30年代後半の生れで、お膳を使った人達が10%を割る程であるとみてもよいと思われます。明治43年生れからは、お膳をつかった人が全くいない年代が多くなり、大正15年生れから、お膳を使った人がいな

くなります。従って東京都城南地域在住の中流階層の人々のようなところから、このような変化が広まっていったことが想像できます。

お膳を使い続けた人達は次第に減り、蔵前工業会員の場合には昭和26・27年頃に0に近づきます。秋田では、昭和20年前後から緩やかに0に近づいていますが、蔵前工業会員の場合より8～9年遅れているようです。東京都城南地域の調査では、お膳を使い続けている人の減少傾向も急激で、昭和3年には0になります。

一方、食卓をやめた人達の累計を示す曲線は、蔵前工業会員の場合に限らず、大正に入る頃からわずかですが見えるようになり、10年代になると次第に下降が明瞭になります。始めは緩く次第に急になり、最後に何%かを残した所に収れんします。この残っている部分が、現在も食卓を使い続けている人々です。蔵前工業会員の場合には、昭和50年位から18～17%の所に落ち着きます。秋田の場合には始めに急激に減る部分がありますが、その後は同じような曲線を描き、同じ頃昭和50年位から35%位の所に近づきます。東京都城南地域在住者の曲線は蔵前工業会員の場合と似ていますが、やや緩い勾配で、最後に23%程食卓を使い続けている人達が残っています。最後に残る数を別にすれば、使い終わりの曲線には使い始めの場合のような差はなく、どこでもそれほど違わないということができそうです。

主として食卓がどのように使われたかについての調査の概略を報告しました。調査の中で全く触れられなかったものもあります。更に多くの集計結果を報告書に盛り込む予定です。

## 〈研究組織〉

主査 平井 聖 東京工業大学教授  
委員 内田 青蔵 東京工業大学付属工高教諭